Ⅳ　表現化に視点をあてた学習の評価

1　学習評価の基本的かまえ

学習評価は、学習によって獲得した子どもの能力・態度の変容を的確にとらえ、効果的な学習指導に役立てるものである。代表的なものに、学期末・学年末に行なわれる評価で、通知表によって子ども・保護者に知らされる。

精神薄弱児の変容を、1時間の授業の中でとらえるのは、極めて困難であるとか、子どもの変容は、理解でなく生活の中での定着でとらえるべきだなどの理由から、学期末・学年末の評価がすべてという考えがある。実際、昨日の1時間と今日の1時間では、全く関連の見られないデタラメとも思える行動の多い子どもたちにとって、1時間の授業の評価に時間をかけることは、意味の少ないことかも知れない。

しかし、1時間・1時間の積み重ねが、学期末の子どもの変容につながることも事実で、やはり、1時間の授業を評価する教師の心がまえが、子どもを育てると言えると思う。従って、評価に取り組む本校の基本的かまえを、次のように共通理解している。

(1)　本校の段階別教育内容表は、発達の順序性を示すものであり、常に到達目標が的確におさえられていること。そのため、絶対評価の立場に立って、子どもの変容を見逃さないように留意する。

(2)　主として知識・技能にかかわるものは、1時間の積み重ねを大切にする。態度・心情にかかわるものは、単元を通してみるなど、比較的長い時間の中で、子どもの変容をとらえていく。

(3)　良い点をみつけて保護者と共通理解をもつ。同時に、問題点・指導の現次点をはっきりとおさえて、「次の指導事項は何か」を正しくおさえておくこと。

(4)　学期末毎に、経験領域の獲得・拡大の状態を通知表の評価観点により総合評価する。

この基本的かまえは、言い換えると、教師は指導経過を常に的確につかんでおり、「何のための指導か」をはっきりもって、授業がされているということである。だから、評価は、子どもを区別したり、子どもに何らかのレッテルを貼ることではない。あくまで、教師の授業、指導上に欠くことのできないものと考えるべきである。従って、評価をあまりにも複雑に組み立てて、毎日の指導に支障がくるようなことは、決してあってはならないことだと思うのである。